播磨灘物語（下）

司馬遼太郎

磨灘物語（下）

司馬遼太郎

講談社

© 1975
RYÔTARÔ SHIBA

第1刷　昭和50年8月20日
第4刷　昭和50年9月30日

Printed in Japan
落丁本・乱丁本は
お取替え致します

播磨灘物語（下）

著者　司馬遼太郎
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21
郵便番号112
振替東京3930
電話東京(03)945-1111(大代表)
印刷所　豊国オフセット株式会社
製本所　藤沢製本株式会社

定価はカバーに表示してあります　(文2)

目次

野火　五
山陽道　五一
備中の山　六九
備中高松城　八九
安国寺殿　一三〇

変報　一五三
東へ　一六九
尼ケ崎　二〇三
遠い煙　二三三
如水　二四九
あとがき　二七三

装釘意匠　三井永一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

播磨灘物語（下）

野火

三木城が落着したあと、官兵衛に休暇のような時期があった。

秀吉はこのあたり、よく気のつく男で、

——すこしの間、姫路へ帰ってはどうか。

という意味のことを、別な表現でくるんで言った。官兵衛は伊丹城の牢から出たあと、ほんのわずかな日数を有馬で湯治しただけで、ずっと戦陣にいるのである。体の回復がまだ十分ではなかったし、ときに息苦しそうでもあった。

さらには、かれは伊丹を出て以来、姫路の父の宗円入道にも会っていない。

ひとり息子の松寿のこともある。松寿については、官兵衛が織田方によって伊丹の牢で発見されたとき、信長が後悔した。幸い松寿は竹中半兵衛が保護してくれていたから一命に支障はなかったが、ともかくも官兵衛が発見されてからこの少年は人質であることから解かれ、姫路に帰っているのである。会いたくもあるだろうと秀吉は察した。

また、官兵衛の妻の櫛橋氏は、このたびの播州の乱で実家が別所方に加担したため、没落した。官兵衛はやがてその一族を救済して自分の家中に加えるのだが、ともかくもこのたびの播州の乱でうけた被害は、勝者の側に立った官兵衛においても大きかった。

秀吉のことばは、

——それらの整理のために、しばらく姫路へ帰れ。

ということだったが、この時代、そういう表現は決して使われない。「しばらく帰れ」というのは暇を出す、という場合に使われるし、ときには、帰らせてこ

れを討つという底意を秘めた場合にも使われ、いずれにしてもおだやかな表現ではない。

「しばらく西播州の代官をつとめてくれ」

と、秀吉はいったのである。これならば、官兵衛は朗らかな事情のもとに、姫路へゆくことができる。

三木城は落城したが、播州は一時に鎮静したというようにはなっていない。

たとえば、西播州の姫路の南方の海岸地方に、英賀城という小城がある。これは、毛利・別所に属した。この城は土地の豪族と本願寺門徒とが合体して織田方に手むかったのだが、三木城落城とともに秀吉の別働隊に攻められ、簡単に落城し、城兵は散った。

このために、西播州の人心がかえって動揺し、治安もわるくなっている。要するに西播州を鎮めておかねば、将来、毛利氏との間に行われるはずの決戦がうまくゆかないというのである。

かといって、それは秀吉の口実にすぎず、要は官兵衛に休暇をとらせようとするのが目的だった。

官兵衛は、西へむかった。

ひきいている人数は三百で、みな平装にもどっていた。

官兵衛はその大将とはいえ、沿道の者がみてべつに威風というものはない。馬に乗れなくなってしまっているかれは、粗末な板輿の上に、腰をぬかした病みあがりの犬のようにすわっているだけである。

ひろやかな播州平野のあちこちに、野を焼く白い煙が這っている。冬を越した害虫の卵を焼き殺してしまうための火で、野火の守りをするのはこの季節の百姓たちのおもな仕事だった。

「毎年は、もう少し早いのだが」

と、官兵衛は、輿の上から、馬上の者に話しかけた。

「ことしは遅れている」

百姓たちは、戦のあいだは、兵火と間違われないために野火を焼くことを遠慮していた気配がある。いくさがおわって、一時に堤もあぜも畑も焼きはじめた。播州の野は、どこもかも野火のけむりが、春霞のようにこめている。

街道を行って夕暮になると、その野火のけむりの根

でちろちろと明滅している火が、濃く赤くみえはじめた。輿の上からその風景をながめていると、なにやらうまれる以前の風景が記憶によみがえってくるような甘酸っぱさを覚える。その野の火の点々とした赤さの群れのなかをゆくうちに、

（なんのために働くか）

という問いかけが遠い潮鳴りのようにきこえてきて、けだるくもあり、物憂くもあり、ときに涙のにじむ思いがこみあげてくる。

官兵衛は、中世そのままで存在した播州の武装組織を、挙げて織田方にしようとした。しかしながらその旗を振るにはあまりにも小さな存在でありすぎ、主家にさえ裏切られ、最大の勢力である別所氏が、播州の地侍を糾合して織田方に抗するという手ひどい目に遭ってしまった。髪が半ば皮膚病で抜けおちたのも、脚が悪くなったのも、小身な官兵衛にすれば大きすぎる志のためであった。

さらには播州のために良からんとしたこの志のために、かえって播州の大小の豪族はほろび、農村の壮丁は死ぬか傷つくか、餓えて病いになった。

（いったい、おれは何をしたのか）

考えようによっては、おそるべきことをしてしまった。結果として勝者の位置を得たが、官兵衛にはこれを基礎にして身代を大きくしてゆくという欲が、本来薄いのである。野火でもながめていればよかったのだ、という思いが、夕闇の中に白くたなびいている煙のように、官兵衛の胸の中にわだかまっている。

御着まできたときに、夜になった。

今夜はここに泊まるつもりで、そのための人数を前日に先発させてあった。

官兵衛とその父祖三代にわたって家老職をつとめたこの城は、すでに空き城になっている。旧主の小寺藤兵衛が、城そのものを捨てて逃げてしまったからである。

先発の者が、城門のあたりでさかんに篝火をたいており、物事にそつのない栗山善助がその宰領をしていた。

栗山は、具足を着ていた。何事がおこるかもしれぬという用心のためであろう。栗山は路上で官兵衛に対

面し、さまざまのことを報告した。おわってから、
「空き城というものは、薄気味のわるいものでございますな」
と、めったに弱音を吐かないこの男が、苦笑しながらいった。昨夜は、城内の闇が人やけものの形をとったり、さまざまな物音をたてるような気がして、一睡もできなかったという。
御着城は、捨てられた城である。
空いたままにしておくと、土地のどういう勢力が押しこんでくるかもしれず、危険であったが、しかし官兵衛がこれを管理する気にはならない。なにやら世間の目から見れば、家老の官兵衛が乗っ取ったようで、そういう目で自分を見られることは、この男の趣味にもっとも適わない。
このため、秀吉に、他の者に管理させるように頼んでいた。が、秀吉の手の者も、三木城の警備やら、その落城後の処理やらにいそがしい上に、かつて三木城と連繋して数珠玉のようにつながっていた播州の諸城が、御着城と似たような状態になっていて、それに入れる人数も要る。
――城を囲んでいるときのほうが、むしろ手が足りたわ。
と、秀吉が音をあげるほど、戦後の処理に多くの人数が要ることに、かれ自身、おどろいているのである。
このため、英賀城攻めにさしむけている人数が、無用になれば御着城に入れる、というふうに秀吉はしていた。
それやこれやで、御着城は小寺藤兵衛が逃げだしたときのままに放置されている。
「物盗りは、入っていないか」
「さすがに、その様子はございませぬ」
栗山善助がいった。さすがに、と栗山がいったのは、御着城小寺氏は古くからのこのあたりの地頭だっただけに、百姓たちの小寺氏に対する人情が残っていて、物盗りなどはしていない、という意味なのである。
その夜、官兵衛は、代々の自分の家の装束屋敷で泊まった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

翌朝、まだ陽が昇らぬというのに、この官兵衛の荒れはてた装束屋敷の門前あたりから、人の声や馬のいななきが騒がしくきこえてくる。

（人の世とは、ばかばかしいものだ）

官兵衛は、掻巻をひっぱって頭からかぶり、もう一度眠ろうとつとめた。騒ぎは、官兵衛には見当がついている。

小寺家時代の旧同僚たちが群れているのである。まさか官兵衛ごとき者の家来にしてくれとまでは言わないだろうが、官兵衛の口ききで織田家に仕えたいという肚でやってきているのにちがいない。

（性懲もなく武家奉公をしたいのか）

官兵衛は掻巻の中の、自分の体の温かみにくるまりながら、ばかばかしく思った。百姓になればいい、と思うのである。

この当時の播州はまだ中世の形態をのこしていて、織田家のように兵農分離は遂げられていない。つまりは農村における農地所有の大なる者が地侍になり、さらにかれらは血族によって小さく党を結んでいる。血族の宗家が大将になり、それらの小さな党が数多くあつまって、小寺氏を盟主としていた。

そのような地侍は、

「侍、士分、お目見得」

などとよばれて、戦いの時は騎馬で出、自分の子飼いの者をひきいてゆく。

小寺家には、士分でない戦闘員もいる。

「徒士」

とよばれる。足軽ではなく、侍の身分をもちつつも、騎馬の侍よりずっと身分はひくく、戦場ではふつう徒歩で駈けまわる。徒士は、小寺氏の米蔵の米で養われている。その給与を知行といわず、「扶持」という。騎乗の身分の者からさげすまれて扶持米侍などとよばれたりする。士分との間での決定的なちがいは主君に拝謁できる資格（お目見得の資格）をふつう持たないことであった。扶持米侍は生活のすべてをお扶持に頼っているだけに一般に忠誠心がつよい。

しかしながらこの当時、

――扶持米侍の忠義は当然。

というふうに思われていた。

扶持米侍は、政治的ではない。家の政治に参加する

のは郷村に知行地や農地をもつ士分以上の者で、これらが小寺家のこんにちの悲運をまねいた責任をもつ。
（みな、百姓にもどればよい）
と官兵衛がおもったのは、この士分以上の者に対してである。徒士はなんとか救済したいと思っている。

官兵衛が門前に出てみると、五人ばかりの男が、
「やあ、官兵衛」
とまぶしそうな表情で言い、そのくせ照れもせずに寄ってきた。
どれもこれも、大身の者である。供の人数やら乗馬、荷駄などがいるために、路上が雑踏していた。
代表格の者は、吉田備後といった。小寺家の分家で、さきに毛利加担を決めて織田派の官兵衛を孤立させた勢力に加わっていた。ながめわたしてみると、あのとき官兵衛を政治的孤独に追いやった連中ばかりである。
「戦勝祝いをもってきた」
吉田備後は、いった。
なるほど、酒樽やら肴やらが馬の背からおろされている。
この習慣は、戦に勝った側へ、土地の神社や仏閣、それに庄屋などが祝品をもってくるというもので、どの土地でもこのことはおこなわれている。
神社や仏閣の場合、この戦勝祝いの習慣は当然といえるかもしれない。前領主から知行をもらって維持してきたものを、新領主になって旧権利を巻きあげられてしまってはこまるのである。それに、「守護不入」という特権もある。境内地には地方政権が権力による入りこみをしないという自治独立の権利のようなもので、それも戦勝者である新領主にみとめてほしい。
ところが吉田備後らは、交戦こそしなかったが、織田氏および官兵衛の敵側にまわった連中である。そういう連中が社寺のまねをして祝品をもってくるなど、あるいはめずらしいといえるかもしれない。
「こまるな」
官兵衛が小声でいうと、吉田備後はそれを吹き消すほどの大声で、
「なあに、めでたいのだ。こまることなど、あるものか」

と、大きな顔いっぱいに笑顔をつくって、小者たちに命じ、どんどん品物を運び入れさせた。

「わしは、うけとれぬ」

「官兵衛、なぜだ、おぬしは三国一のめでたい男になったのだ。播州中の酒という酒をこの屋敷に持ちこんでもおぬしは受けとらねばならないのだ」

（こんな男にかかっては、何を言ってもはじまらぬ）

と、官兵衛は脇腹の冷える思いで居つつも、ともかくこの品物を拒否せねばならない。秀吉に対する手前もあった。官兵衛が御着で勝手に戦勝祝いをうけているとあれば、秀吉も官兵衛を増上慢として不愉快に思うにちがいない。

御着で、官兵衛は難渋した。

城をすてて逃げた藤兵衛の旧臣が、つぎつぎに祝品を運んでくるのである。酒樽や肴が、座敷という座敷に所せましと置きならべられた。

元来、物が見えるはずの男だったが、しかしこんな戦後処理をせねばならぬとは思いもよらなかった。

まず、いちいち断らねばならない。

「これはこの官兵衛が頂戴するわけにはいかぬ。わしとしては、羽柴殿か織田殿へお取り次ぎするということが精一杯で、それも出来るかどうかわからぬ」

と、持ちこむ男どもに、いちいち諭すようにして言ったが、なかには官兵衛の肩を抱くようにして、

「いいではないか。官兵衛が飲み食いしてくれればそれでいいのだ」

という者もある。

官兵衛は、もう笑っているしかない。

どの男も、官兵衛を伊丹の荒木村重に使いにやるという小寺藤兵衛の仕組んだわなに協力した連中ばかりだった。

――官兵衛を使いにやる。そちら（伊丹）で殺してくれるように。

というようなむごい仕掛けなど、普通の心があれば為しがたいことだが、しかし政治状況が対立して激化すると、人間は政敵に対して何を仕出かすかわからない。藤兵衛とその重臣たちがそうであったが、そういう状況が去ってしまうと、夢から醒めたようにけろりとしてしまうのも、政治状況がもつ幻覚というものか

もしれない。
しかし、幻覚とは言いきれないことに、官兵衛の体が、たれの目からもわかるように不具になってしまっている。この姿を見ると、祝いの品を持ちこんでくるたれもが一瞬たじろぐのだが、しかしすぐあとに、
——自分はあのとき、反対した。
とか、
——殿のまわりの一部の者が内密で決めたことで、自分は聞かされていなかった。もしあのとき自分の耳に入っておれば、おぬしにあのような苦労をさせなかったのだが。
とかといったようなことをいう。
なかには底抜けの陽気さで、
「官よ、官。おぬしはその程度でよかったが、わしらを見い、殿には逃げられる、御城はつぶれる、知行はなくなる、大変な目に遭うてしもうたぞ」
と、たがいに天災に遭ったように言う。大陽気でこれをやられると、聞いている官兵衛までが一瞬勘ちがいして、自分だけがなんだか不具になるだけで済んだというような、場違いなうしろめたさを覚えてしまったりするのである。
官兵衛は姫路城に入った。
城門には、一門の者や老臣たちが出むかえている。
官兵衛は、板輿の上から、いちいち微笑した。皮膚病で抜け荒れた頭髪をかくすために、柿色の頭巾(ずきん)をかぶっている。老臣たちの見るところ、官兵衛の顔は伊丹以前にくらべて一まわり小さくなっていて、目ばかりが大きい。
官兵衛の微笑というのは、歯を見せない。唇が横に薄く伸び、目が思いきって細くなるという表情で、変に愛嬌がある。
城門のそばで、五十年配の僧が歩みよって、
「よいお顔になられた」
と、大声でいった。
官兵衛の少年のころに手習を教えてくれた城下の浄土宗円満坊の僧放哉(ほうさい)である。
当時の放哉は人の葬式にやとわれて阿弥陀経をあげるといういわば葬いを主にしている僧であった。堂々たる寺院の主ではなかったし、いまなおそうである。

しかし、領主から寺領をもらって寺を維持している天台、真言、禅宗の僧には見られないような感じの、いわば町中で寂びたような人懐っこさが、人柄の全体に出ていて、官兵衛は相手が自分の手習の師匠だけに、板輿から降りてあいさつしようとした。

脚が悪いために降りることに難渋したが、ともかくも、ひざをかがめてあいさつをした。

あとは、そのまま歩行し、やがて肩をゆすりながら石段を登りはじめた。城門で迎えたひとびとは、官兵衛のあとをぞろぞろとついてくる。官兵衛はふりかえって、

「痛ましそうか」

と、例の微笑をした。そんなに痛ましがるな、とみなに言ったつもりだった。

放哉は笑いもせず、

「決して」

と、心からいった。少々体にご不自由があったほうが人柄に苦味と重味ができるようでござる、元来、殿は小柄でかるがるとされた御人であったが、ご不自由なおかげで二まわりも三まわりも大きくなられたようでござるよ、と、背後からいうのである。

「放哉どのよ」

官兵衛はがたがたと石段を登りつつ、円満坊が雨漏りしているのではござるまいな、とからかった。雨漏りしているから屋根でもふいてもらいたいという下心で賞めているのか、という意味である。

本丸の玄関には、父の宗円と、美濃菩提山から帰ってきた息子の松寿が、出迎えていた。

二人とも、官兵衛の姿を見て、おどろいたらしい。官兵衛はそれを抑えるように、

「命一つを持ちかえりました」

と、父にむかっていった。

帰城した一日は、忙しかった。

近郷の庄屋という庄屋が、一人のこらずやってきて、官兵衛の無事を祝った。

ほとんどが、行儀も作法もない。

「おのしも、命あってよかったのう」

などとぞんざいな言葉づかいで、顔じゅうを笑いじわにしながら寄ってきたりする。かといって官兵衛を

軽んじているわけではなく、官兵衛の領地の庄屋ほど黒田家のためになってくれている連中はない。

庄屋というのは大百姓から選ばれ、百姓の世話頭といった存在で、村内の秩序をまもりつつ年貢をあつめて領主に取りつぐといった職だが、黒田家の庄屋は在郷の守備隊長といった軍事職でもあった。黒田家が戦に出かけて行ってしまう場合、領内の守備に任ずるのである。このため大庄屋の幾人かは黒田姓があたえられ、一門に准ずるあつかいになっていることは、すでにのべた。

もっともこれについては、

「百姓は百姓」

と、多少不満をもらしている庄屋もある。庄屋というのは農民の利益代表で村内の秩序の守り手になっていればいいのに、なまじい領主の都合で軍事に参加させられたりすると、村の秩序がささがさになるというのである。

官兵衛はかつて庄屋に領内の治安参加を依頼したときに、右の旨を言って、まっぴらだとことわった庄屋もあった。

勘右衛門という男だった。

そのとき、勘右衛門は、

「地頭の損になりますぞ」

ともいった。一村が農事を怠けるようになって年貢がすくなくなる、という意味である。さらに勘右衛門は、そもそも地頭（領主）が年貢をとりたてるのは百姓に代って外敵をふせぐということの代償でござろう、それが庄屋以下に戦のまねまでさせるというなら、年貢を上る意味がござらぬ、ともいった。

勘右衛門はその意見はいまでも変えていないし、領内警備には参加していない。

ところが一面、勘右衛門は官兵衛が好きになってしまっていて、この官兵衛の帰還の日も、まっさきに城へやってきて、官兵衛をなぐさめた。元来、感情の量が多いらしく、官兵衛の姿をみて痛ましさに涙声になり、

「侍はつらいものじゃのう」

と、皮肉ではなくどうやら心からいった。

官兵衛はのちにこの勘右衛門に請い、戦はさせぬから郡奉行になってくれぬか、と何度も口説き、ついに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com